



1

人間は誰しも仮面を被っている。体のほとんどは水で出来てると言うが、あれは嘘だ。

体のほとんどは嘘で出来ている。本当の事なんて少ししかない、嘘、嘘、嘘だらけのフェイクだらけの仮面を付けた奴等ばかり。

今僕が見ているTVの映像もそうだ。TVには、ある企業が悪い事をしたらしい。

どのように悪い事をしたのかは興味無かったので覚えてないが、彼等が被っている仮面は、僕にはよく見えた。

謝罪の仮面。

カメラのシャッター音とフラッシュが、鳴り、光る中で、彼等は謝罪の仮面を被っ

て、謝罪する。

この度の事は、大変申し訳ございませんでした。などと社長らしき人物がTVの向こうで言っているが、馬鹿らしいにも程がある。

嘘をつくな、この仮面人間。

仮面人間どもは横一列に全員同時に頭を下げた。

頭を下げてても彼等が被っている仮面は落ちない。落ちるはずがない。

何故なら、彼等が被っている仮面は実在してるようで実在してなくて、実在していないようで実在する存在だからだ。

僕には特殊な能力がある。

幼い頃から、現在高校生である今日まで持っていた忌まわしき能力。

能力というより呪いなのかもしれない。

“仮面を見る能力”

嘘を見抜けるのとは微妙に違う、何と云うのだろうか、言葉の嘘が分かるので

はなく、“表情の嘘”が分かると言えばいいのだろうか。

人はどんな時でも仮面を被る。

これは比喻でも何でもなく、ただの事実だ。

人は相手を偽るために、あらゆる表情の仮面を被る生物。

素顔を見せる時なんて滅多にない、いつだって人間は仮面を被って、自分を偽って生きてる。

泣いてるくせに笑っていて、楽しくないくせに楽しそうにして、自分という素顔を仮面で隠して生きる生物。

それが、人間だ。

幼い頃はそれを理解するのに、苦勞したものだ。

仮面が見えるのが当たり前だと思っただし、その仮面がどういうものかを、理解するのに多大な時間を費やした。

そして、一時期僕は人を信じられなく

なった。

破綻した。

それもそうだ。

今まで信じていたモノが信じられなくなったのだ。

僕と楽しそうに喋っていた友達はいつも笑顔の仮面を被っていて。

僕が困ってる時に助けてくれた知人も、仮面を被っていて。

僕の両親も、仮面を被っていた。

人間は誰も仮面を被っている。

体は水なんかじゃ出来てはいない。

ほとんどが嘘で作られている。

嘘という嘘。

嘘、嘘、嘘。

仮面。

仮面、人間。

それを理解するのに一体どれくらいの時間を費やしただろうか、それに絶望するのどれくらい時間を費やしたのだろうか。

うか。

「これからカラオケ行かない？」

僕と同じ学校の友達が僕に声を掛ける。時間割の最後の授業が終わり、音量を消して見てたワンセグ携帯を閉じて、机

の中にある教科書を勉強のために教冊持って帰ろうとバックに入れる瞬間だった。

僕の前の席にいる人物、まあ一応友達である奴に声を掛けられた。

仮面を見る事が出来て、仮面の正体を知った僕だが、どうにか今は立ち直った。

前はそのせいで不登校になってた時期もあったのだが、今では何とか振る舞う事が出来ている。

学校というのも社会の一部だ。社会の練習場。

社会に出ると色々な事が人間に襲いかかる。

それは人間関係だったり、仕事による

その中に顔色が悪い学生が追加される。

顔色が悪い学生とは僕の事で、その学

生はとも沈んでいた。

……何故だか、自分でも分からない。

まさか仮面にショックを受けたののだろうか、馬鹿な。

今までだって、何回も何十回も何百回も見てきたじゃないか。

だと言うのに、今更仮面を見て悲しむなんて……そんなの有り得ない。

きつと、疲れていたんだと思う。

この眼は、本人が必要としていないと言うのに、僕が起きている時間、ようするに目蓋を開いて視認している時は、常時発動される能力で、またその能力は微妙に僕の体力を奪っているのだ。

なので僕は起きている時に多大な体力を要する。

昔は何回も倒れていたな、何回病院に入院した事か。

疲労だったり、上司からの叱責だったり、その災害から身を鍛えるために存在するのが学校だ。

だから学校でやっていけない人間は、社会には出れない。

社会に出れないって事は、生きてはいけないって事だ。

僕は……一応まだ生きていたい。

「いや……ごめん、今日は気分悪いから帰る」

「えー、残念だなあ。アイちゃんがいないと、寂しくなるよ」

ごめんごめんと謝りながら、アイちゃんというチャン付けされた不本意なあなたに不満を抱きながらも、僕は教室を後にした。

仮面を被っていた友人の姿を見ないように、一度も振り返らないで教室を後にした。

今はそれもなくなり、慣れてきたのだと思っていたのだが……油断しているところなるって事か。

油断してるつもりはなかったのだが、そういう事を思っている時に起こる事こそ油断したと言うのか。

反省しよう、あまり期待しすぎてはいけない。

自分の体を、体力を信じてはいけない。適度に休憩を行うように心がけよう、もしくはもっと慣れるように鍛えよう。

でないと、社会では生きていけない……死んでしまう。

とりあえず、今は休憩に専念する事にした。

嫌な現実を見たくないから、眼を逸らすために眼を閉じた。

面白い皮肉だ。

逸らしたいのは現実というよりも、僕の眼肉自身だと言うのに、……何て皮肉

だ。

夕焼けの赤い空を鏡のように映した池の映像が段々とカーテンが掛かる。

カーテンが完全に下がり、僕の視界は目蓋に閉ざされた。

これで嫌なものは見えない、仮面は見えない。

聞こえて来るのは、人々の声と風の音。ただそれだけだ。

聞こえて来るだけだ。

一時の安息に身を委ねる。

思わず、僕は……そのまま……意識が消えていった。

頬を突かれる感覚が神経に伝わり、意識は目覚めた。

どうやら僕はあのまま寝てしまったらしい。

体は冷め切っていた。

馬鹿らしい、体を休めるためにここに

来たのに、風邪になっては元も子もない。

妙に重量がある目蓋をこじ開け、現実を見つめた。

「あ、起きた」

そこには、誰だか分からない女の子がいた。

どうやら、僕の頬を突いていたのはこの子だったらしい。

起きてからも少し放心状態だった僕を、また突いて来る。

そんなに愉快な存在なのだろうか、僕は。

「おい、起きろー。風邪引くぞー」

「目蓋を開けながら寝る技術は僕にはないよ」

まだ寝ぼけながらも、冷淡に僕は言った。

思考はまだ屈しているが、仕方ない、結構な時間寝ていたのだろう。

ど……、何でだろ、この子……『仮面をしてない』。

笑顔をする時も、文句を言う時も、目の前の少女は、素顔を見せたままだった。他の人間は仮面を被っていたというのに、この子は、被っていないかった。

「……え、どうしたの、君？」

「え？」と思わず言ってしまったが、

思考は遅れて今頃気付いた。

忌まわしき眼球から、僕は、涙を流していた。

「何で、泣いてるの？」

自分でも分からなかった。

本当に、本当に分からなかった。

「悲しい事でもあったの？」

優しく、少女は僕の顔に手を添える。

その手は優しく、温かかった。

涙が出るくらい、温かかった。

空は赤から黒に染まり、光は公園のあちこちに置かれている街灯だけになっていた。

「あはは、起きてる起きてる。駄目だよ、こんな所で寝てちゃ、風邪引くから気を付けなさい」と

「……ああ、そうだね。ご親切に、どうも」

どうやら、心配して僕を突いていたらしい。

出来れば親切にしてくれるなら、肩を揺らして声を掛けるにしてもらいたかったが、諦めよう。他人に、必要以上に期待を寄せるのは間違いだ。

「こんな所で寝てるなんて何かあったの？ ……はっ、まさか家なき子！？」

「懐かしいね、そんなドラマがあったね」

僕は思わず、声を上げて泣いた。

2

人間は誰しも仮面を被っている。体のほとんどは水で出来てると言うが、あれは嘘だ。

そう思っていた。

思っていたのだが、世の中には必ずしも例外はあるものだ。

正常がいれば、異常がいるのと同じように、必ずしも普通という枠内に入れない変わり者はいる。

それが、彼女だった。

名前は、水島理名。

みずしまりな。

僕と同じ年の女の子で、僕を助けてく



れた少女。

結局あの夜、僕は声を上げて泣いて、彼女に泣き縋る形になった。

本来ならば、赤の他人であるはずの人間を、慰めてあげるなんて理解に苦しむ所ではあるのだが、その不理解な行動のおかげで、僕は助かる事になった。

思い出すと赤面ものなんだが、それを補って余るくらいに、……嬉しかった。

時間は、空が赤色がかかった夕焼けの時間。

僕は初めて出会ったあの場所で、彼女と待ち合わせをした。

中央に大きな池があり、その周りにベンチが数カ所設けられている公園。

老人やら、カップルやら、リストラされたかのように物凄く落ち込んでるスーツ姿の中年男性の中に、新たに常連客が

追加された。

端から見たら、カップルに見られるかもしれないが、そこはご安心。

二組もカップルいるよ、嫌な時代になっただなと思われる事はない。

何故なら、僕と彼女は昨日出会ったばかりの友達だからだ。

「だーれだ？」

僕の視界を、急に何かが閉ざす。

こんな事をするのは、そしてこの声の持ち主は、あいつしかいないのだが、あえてここはボケておこう。

「ジャイアント馬場」
眼球が圧迫された。

失明する所だった。

思わず、涙目になる。

「乙女を怒らせた罰！」

訴えがける僕の視線に、それよりも強

が忘れた。

そいつとは学校で何回か話すが、そいつ自身には何の興味もないので覚えてない。

ならば、そんな奴と何で話してるんだと疑問に思わなくもないが、その考えは危険だ。

例え相手がどんな嫌な人物だとしてもコミュニケーションはちゃんと取らなくてはいけない。

人脈はどんな時に役立つか分からないのだから。

社会に出たら、それを嫌と言う程に思いつ知られるだろう。

だから、社会の練習場である学校で挫けてはいけない、ここで挫けているようでは社会で生きてなんていけないのだ。

なので僕は顔を取り繕いながらも、その嫌な人間と会話した。

話題は常にそいつの自慢話だ。
彼女が可愛いんだが俺に甘えてばかり

い意志で訴える少女。

某有名校の学生服を着ていた。

まるでその学生服は彼女のためにあるかのように、似合っていた。

赤い空の光が混ざったのか、長い黒髪は少し赤色がかっていた。

それはとても彼女に似合う色だ。
強く優しい心を持った彼女に相応しい色であった。

僕は思わず苦笑する。

何だか、その光景がとても綺麗に見えたからだ。

おかしい話だ。

……現実って、こんなに綺麗なものであったのかと、彼女を見て思った。

ふと、学校での出来事を思い出す。

それは、やたら自慢話が多い男子の事だ。
名前は……四文字程度だった気がする

自分が大したことない奴だと、だから自信という仮面を被っているのだろう。

昔写真を見せてもらったが全然可愛くなかった彼女に、監督や先輩に嫌われているだけで実際は何ら期待されていない部活動、そして期末の英語のテストは五十点にもいかない脳味噌。

笑わせる、こいつの仮面は何も僕じゃなくても他の人間にも分かるだろう。

こんな見え見えな嘘に、仮面に、気付かない奴はいない。

それは、自慢人間と僕の会話を途中で終わらせた人間を見れば分かる事だった。
自慢人間が楽しそうに口を回らせていると、途中他のクラスメイトの男子に呼ばれたのだ。

何だろうと疑問に思いながらも、僕は自慢人間を適当に言って放置して、クラスメイトの所へと向かった。

何でも、その人間は自慢人間の事が嫌いらしい。

あんな奴と喋るなよ、お前も自慢野郎になっちまうぜ。らしい。

お前面白い奴なのによ、あいつと喋ると面白くない菌が移っちゃうぜ。と、言っていた。

どうせ、あいつお前と仲良くなりたから有りもしない事をホラ話を言ってるだけだろ？ やめとけ、汚れちゃうぞ、お前。と、言っていた。

そいつも仮面を被り、同じ仮面人間である自慢人間の事を中傷し、交流をやめろと言った。

笑わせてくれる。

お前もあいつと同じ仮面人間の癖に、本当なら、自慢人間だけじゃなくお前とも交流を絶ちたいくらいなのだ。

だが社会に出るには、今の内から人間関係に慣れないといけない。だから、こりやって必死に取り繕ってるというのに、……そんなネガティブを抱きながらも僕はそいつの言葉にYESと言った。

3

これは、彼女と初めて会った日の記憶。

初めて彼女と出会い、彼女に頬をつつかれて、彼女を前に泣き出して、そして、思わず胸の内を話した、あの夜。

「僕には仮面が見えるんだ。人が被っている嘘。本当という素顔を隠した仮面を、僕は見る事が出来るんだ」

僕はこの事は他の人間には話さない。親にだって信じてもらえなかったのだ。それをどうして他人などに話せるだろうか。

だけど、この日の僕はどうかしてた。

僕が今まで胸の中に仕舞っていた忌まわしき事実を、彼女に話した。

全て、彼女に話した。

もしかしたら、そのおかしい僕の行動

仕方がない、でなければこのクラスメイトとの交流が悪くなるのだ。

へタしたら、僕まで除け者扱いだ。それはあつてはならない、絶対にならない。

なので、僕はまた取り繕い、気を付けるよと他に適当な事を言って、終えた。仕方がないのだ。

どうせ、周りから嫌われてる自慢人間との関係はあまり役に立たないものだろうし、それだったら、まだ友人が多いこのクラスメイトとの交流を大切にしたい方がいいだろう。

人間関係とはそういうものだ。

そう、……そういうものだ。

仮面を被って、素顔を隠して、接する。

それが、人間なんだと思っていた。

「……何よ、人の事をジロジロと見て」
女の子は、僕の視線に嫌そうな顔をする。

今頃思ったのだが、この子はなかなか

も、運命の仕業だったのかもしれない。

「あはは、奇遇だね。同じ同じ」

自分の顔に指を指して、彼女は言った。

何の仮面も被らずに、嘘という仮面を被らずに、彼女は素顔という証拠を見せつけて、言った。

僕と同じ、仮面を見る”能力者”

これが、運命という言葉で言い表せないなら、他にどのような言葉を使えばいいのだろうか。

きっと僕は彼女と出会う運命にあったのだろう。

そして彼女も僕と出会う運命にあったのだろう。

運命というのは、人生を上手に生きられなかった人間達の言葉のように思われるが、それだけではない。

運命というのは、このように希望を込めた言葉としても使えるのだ。

良い顔をしている。

少なくとも、健全な男子なら確実に惚れるであろう顔立ちだろう。

「……だからジロジロ見るなつての、恥ずかしい。眼球を刎り抜くぞ」

おっと、怖い怖い。

少しばかり怒らせてしまったようだ。

僕は慌てて謝る。

仮面を被らない少女に、僕といつも素顔で接してくれる少女に、僕は、心から謝った。

そして心の中で感謝した。ありがとうと。

彼女だけでなく、僕は思わず運命にも感謝してしまった。

この少女と僕を巡り合わせてくれてありがとうと、”僕と同じ少女”と巡り合わせてくれてありがとうと、僕は感謝の言葉を心で呟いた。

今、夕焼けの赤を背負う彼女を前にしても、僕は思う。

これは運命だったのだと、そしてこの出会いは素晴らしいものだったと言える。

「僕、君に出会えてよかったよ」

「……何よ、いきなり」

同じベンチに座る可愛らしい少女が、応える。

いきなり意味不明な事を言ったので、困惑させてしまっただろうか、だが言いたくなったのだ。

僕がどれ程、彼女に感謝してるかを。

だから、僕は彼女に言った。

僕が今までどういう人生を送って来たかを、今まで世間に対してどういう目で見えてきたかを、そしてこのままだとどうなっていたかを予想で言った。

全て、言った。

だから、感謝してると、心を込めて言った。自分で恥ずかしいと思うが、仕方がない。

本当に感謝してるのだ。
同じ眼を持つ者に出会えた事。

同じ苦しみを味わう者、唯一心が通じ合える友人。

僕が思いの内を全て話し終えると、彼女は嬉しそうに応えた。

「そうだね、確かにそうだね。こんな眼を持つ人が他にもいるなんて意外だね。とても嬉しいよね。やっぱり一人っつのは悲しいからね」

その顔は笑顔だった。
笑っていた。

恐らく、以前は僕と同じでこの眼を持つ事による苦しみを背負っていたのだろ

う。

だがそれも、半減される。少なくとも、同じ苦しみを持つ人がいたのだ。

痛みは、分かち合う事が出来る。

「でもね、君で残念な事が一つだけあるんだよ」

「——え、それって何？」

痛みは分かち合う事が出来る。

一人が痛みを背負ったら、その痛みをもう一人も背負う。

そうすれば分かち合える。
痛みは半減し、力は湧く。

それが痛みを分かち合うという事。
友達だから、友人だから、出来る事。

「だって君も、仮面を被っているんだもん」

立場。

いつも素顔でいて、仮面を見る事が出来る能力を持ったあの少女とは違う。
僕は素顔なんか晒していなかった。

仮面を被っていたのだ。
他の奴等と同じ仮面人間。
彼女を苦しめる仮面集団の一人、仮面人間。

ああ、何て道化なんだろう。
ただ僕は一人で舞い上がっていただけだった。

出来ない歓喜のダンスを踊っていたに過ぎなかった。
何故なら、僕は道化師。
下手な歌を歌い、下手なダンスを踊り、人々に笑われる存在。

思わず、涙が流れる。
僕だけしかない、窓も雨戸も閉めて、ドアも閉めて、光を完全に閉めた闇の空間。
自室で、僕は一人涙を流していた。

仮面を被らない同士で、出来る事。

4

時間は日付が変わり初めて深夜零時。

僕はあの言葉を聞いてからというもの、ずっと放心状態だった。

“僕も被っている？”

仮面を、周りの人間と一緒に、仮面を被っている？

驚きを隠せなかった。

まさか、僕も他の奴等と同じ仮面人間だったなんて。

自室に置かれている縦長の鏡を覗いてみる。

そこには仮面を被っていない自分自身の姿が映っていた。

……仮面は映っていない、僕は仮面な

今この場には彼女はいない。

救ってくれる人はいない。
だから代わりと言ってはなんだが、僕は暗闇に救済を求めた。

暗闇は何も返事はしない。
ただ僕の存在を包み込むだけ……、僕は暗闇に成すがままに包まれて、目蓋を閉じた。

気が付いたら、朝になっていた。
黒色に染まってたはずの視界が、目蓋越しからも明るい色へと変わる。

夜は終わり、朝の始まりだ。
憎めずにはいられなかった。

光が憎らしい、闇が愛おしい。
絶望が体内で蠕動する。

「あははっ」

思わず笑みが零れる。



僕は一体全体どうしたのだろうか。

どうしてこんな事になったのだろうか。

彼女に会ったからだろうか、自分が

被っている仮面に気付いた事だろうか、

……分らない。

分らない分らない。

その日、僕は学校を休んだ。

とてもだが、学校に行ける状態ではなかったのだ。

本来ならば、出席日数はとても重要で、後々進学するのに必要不可欠なもので、体調管理にも気を付けていたのだが、……休まずにいたのだが……何か、もう駄目だ。

後々の事を考えずに、僕は電話で担任に電話し、欠席する事を告げると、光が微かに零れていた雨戸を完全に閉めて、暗闇にまた抱かれる事にした。

今は、今は……何も考えたくない。

出来れば、このまま時間を止めていた

かった。

それから、どれくらいの時間が経ったのだろうか。暗闇の中で、携帯電話の音と光が暴れる。

テーマは、「灰色の銀貨」というアー

ティストの『鼓動』という曲。

携帯電話の光がなければ、この空間に相應しい暗い曲。

この曲は電話着信の時に流れる曲だ。

面倒臭いが、仕方ない。

僕は怒りを感じながらも、携帯を確認する。

もし、クラスメイトだったら無視しよう。担任だったら、一応後々のために出ておこう。……僕に未来があればの話だ。が。

……着信名を見ると、それは意外



ある場所へと向かった。

彼女と初めて会った場所。

中央に大きな池があり、その周りにベンチが数カ所設けられている公園。

老人やら、カップルやら、リストラされたかのように物凄く落ち込んでるスーツ姿の中年男性は、今はいないが、それ。いい。

むしろその方がいい、彼女と二人つきりになれる。

「こんばんは、遅刻者さん。学校が終わったら、この公園で待ち合わせて言ったのに、随分と待たせてくれたわね」

額には怒りマークを浮かべた少女が一人、ベンチの所にいた。

この前と同じ顔で、素顔で彼女は僕に話しかけた。

だが、僕は……仮面を被って喋る事しか出来ない。

「ねえ、僕って今も仮面を被ってるのかな？」

その言葉に少し驚きながらも、彼女は言った。

「うん、被ってるよ」

改めて思い知る。

僕は被害者じゃなく加害者。

仮面、人間。

「でも……その仮面はどこか他の人と違うかな。……まるで、素顔を見られるのが怖いから被ってるみたい」

え、……それはどういうことだろうか。「普通は嘘をついているから仮面が見えるんだけどね。……君の場合は違う、何だか、怖がってるように見える」

怖がってる？

僕が……何に？

彼女は僕の方へと歩み寄り、僕の顔に触れた。

な人物だった。

水島理名。

仮面を見る事が出来る少女、いつも仮面を被らない少女。

あれ……僕はいつ彼女に番号を教えなかった。

僕は、少し戸惑いながらも彼女からの電話に出ることにした。

僕の番号を知っていたのは意外だったが、……いやほんとは恐怖を感じなくてはいけないんだろうが、何故だろうか、僕は彼女にそんな感情を抱きはしなかった。

5

時間はサラリーマン達が仕事を終えて自宅へと帰宅する頃の時間帯。

そんな遅い時間に僕は逆に、自宅から

「君は多分、今までずっと仮面を被ってたんだね。多分無意識の内だと思おうよ。周りが仮面人間ばかりだから、自分も仮面を付けなくてはいけないと思ったんじゃないかな。だから、無意識に君は仮面を被っていたんだろ。自分自身を隠すためじゃなくて、本当の自分が分からないから、きつと怖かったんだよ、この仮面を外したらどうなるか分からなかったから」

幼い頃から、僕は仮面を見る能力を持っていた

最初はその仮面が何かよく分かっていたが……、果たしてその時なのだろうか？

僕は、その時から、仮面を被るようになったのだろうか。

「ほら、今だって無表情を繕ってるくせに……」

彼女は僕の目元に優しく手を添える。
温かい、優しい手。

その優しさに触れられて初めて僕は、
自分が泣いてると言う事に気付いた。

「辛かったんだね。……仮面を見るのが、
仮面と接するのが、……だから泣いてる
んでしょ？ 自分も彼等と同じ仮面人間
なんだと気付いて、だから泣いてるんで
しょ？ 仮面を見るのが、自分と接する
のが、辛くなって」

涙は止めどもなく流れる。

止めようとしているのに、蛇口は閉まら
ない。

果たしてこれは悲しみが溢れているのか、
喜びが溢れているのか分からないが、とて
もひどい顔をしているのだろう。

「……あちなみに、ひどい顔はしてな
いよ。むしろ、綺麗な顔だよ。とても
……とても……ね」



よ」

消えかかる思考の中、彼女の言葉が脳
内に刻まれる。

本当に、本当に、改めて思い知った。

君に出会えて良かったよ。

心の底から、僕は彼女に感謝した。

6

人間は誰しも仮面を被っている。
体のほとんどは水で出来てると言うが、
あれは嘘だ。

体のほとんどは嘘で出来ている。

本当の事なんて少ししかない、嘘、嘘、
嘘だらけのフェイクだらけの仮面を付け
た奴等ばかり。

だけど、それが悪い事なのかと言うと、
そういうわけではない。

そう言うと、彼女は僕を抱きしめた。

「大丈夫。仮面を被るってのは、別に悪
い事じゃない。人はね、隠したい事が一
つや二つ、いやもしくはそれ以上、必ず
持っているんだよ。だからね、仕方がない
んだよ。仮面を被らないと、自分を護る
事が出来ないからね。人の心はとても貧
弱だから、仮面という盾をしないと、す
ぐに壊れてしまうんだ」

彼女の言葉が耳元で直に囁かれる。

その言葉は、今までのどんな言葉より
はつきりと僕の心に残る。

「……だけど、君は仮面を被ってない
じゃないか」

残るからこそ、違うと思った事は直ぐ
に言った。

だって、彼女は仮面を被ってない。

彼女は、誰もが被っていると、心は貧弱
だから仮面という盾をしないと壊れてし

そもそも善悪の判断など簡単に出来る
ものではないが、少なくとも自身を護る
のなら、仕方がないと思う。

自身を護るためなら何をしてもいいわ
けではないが、盾をするぐらいならいい
だろう。

人は盾がなくては生きていけない。

仮面を被らないと、生きてはいけない。

「ねえねえ、今度こそカラオケ行こうよ。
アイちゃん」

僕が脳内でちょっとした哲学を思考し
ていると、目の前の席にいた友人がカラ
オケに誘って来た。

……全く、本当にカラオケが好きな奴
だ。

そんなに、カラオケって面白いものだ
ろうか。

……というか、アイちゃんってなんだ。
アイちゃんって、意味不明だぞ。そのあ

まうと、彼女は言った。

だが、彼女は被ってない。
いつだって、素顔だ。

今も、彼女は仮面を被ってない。

「言ったでしょ、誰もが仮面を被って
るって」

「君は被ってないよ……」

「被ってるよ」

思考は段々と薄れがかっていく。

まるで窓に息を吹きかけて白色になっ
たかのように、段々と色は無くなってい
く。

目蓋は……重くなっていく。

「君には見えないただだよ……。大丈夫、
被ってない人なんていないよ」

彼女に体を抱かれながら、僕は思考が
段々と落ちて行く。

それは暗闇よりも優しく、暗闇とは
違って温かかった。

「大丈夫だよ、“僕”も仮面を被ってる

だ名。

「え、だって、水島の島って、英語でア
일랜드じゃん」

「分かりにくっ……」

ミッズーと直球で呼ばれるのも嫌だが、
そんな遠回りに言われるのも何か嫌だ。

「いいからカラオケ行こうよー。あたし、
もう我慢出来ないからね。絶対逃がさな
いよ、今日は絶対カラオケ行こう。用事
は全てキャンセル。カラオケ優先ね」
必死に彼女は僕をカラオケへと連れ出
そうとする。

……そんなに、僕とカラオケ行きたい
のだろうか……彼女が被っている仮面を
見てみる……僕と行きたいというより、
歌いたいだけなのかな。

何か彼女が被っているのは友情という
仮面な気がする。

この子、友達はそれなりにいるがカラ
オケに行くメンバーは少ない。

「どうか僕しかいない、仕方がない……この子は音痴だからなあ。」

「分かった。分かりましたよ。行きます、行きますです。僕は、君と一緒にカラオケ行くことにしますよ」

両手を上げて降参。

降参した者は、強者の言う事を聞かない。

「OK! OK! それじゃ、さっさと行こう! 音速で行こう! ホラ、早く!」

全部の言葉にマークを付けて、彼女は僕の手を引きずって教室を後にした。

途中、自慢人間に出会って捕まりそうになったが、友人が物凄い睨みを効かせて、退散させた。

相当あの男子の事が嫌いなんだな。

「あ、あとさ。今頃聞くのも何だけどさ。どうでもいいことかもしれないけどさ」

彼女は急に立ち止まって、僕に聞いた。

「何であんた、〃女の子〃なのに僕って一人称なの?」

……そういえば、そうだ。

今頃気付いたが、自分の一人称が僕って事に、今頃気付いた。

そうか、この癖まだ治ってなかったか。

「いや……ぼ、じゃないや、私って兄が四人ぐらいいてね。幼い頃から、そいつらとよくいたから、僕って一人称がなかなか治らなくて」

「ええー、それ気を付けた方がいいよ。女が僕って言うなんて、変だよ」

それもそうだ。

確かにそうなんだが……癖なのだから、仕方がないように思える。

だがなるべく治さないといけないだろうなあ、社会に出る時に、一人称が僕だと色々マズイかなあ。

「よし、じゃあ今日はカラオケだけじゃなくて、合コンもしよう! 合コン!」

野郎達の前になれば、僕ってのも言いつ

らくなるでしょ!」

きつと言いつらくなるってわけではないと思うが、彼女は嬉しそうに携帯を取り出し、片っ端から電話を掛けた。

まずい、本気らしい。

「OK! 三人ぐらいゲットしたよ。これでバッチリだね!」

グッ、と親指を立てて、笑顔で言う。全然グットじゃない、グットじゃないよ。

「大丈夫。その後、ホテルに連れて行かないようにちゃんとするから、ただ金をあちらに出させて、ついでに口癖も治すだけ」

……それって、どうなんだろう。

善悪の判断は、ただの女子学生が出来るものではないと思うが、……これって悪い事な気がする。

「いいからいいから! ホラ、さっさと行くよ!」

また手を引かれ、僕は強引に連れて行



かれる。

……仕方がない、人間関係というのは社会に出る時に必要なものだ。

今の内に、慣れておくとしよう。

廊下を手を引かれながらも走っている、窓から見える景色に、あの時の体験が蘇るものがあった。

中央には大きな池が広がっており、その周りには数カ所ベンチが設けられていて、そのベンチには散歩した後の休憩だと思われる老人や、こんな時間から熱々なカップルや、何故かスーツ姿で沈んでいる中年男性の姿が見受けられた。

その中に、顔色が悪い女子学生はいない。

その中に、僕を助けてくれた少女は、もういない。

もういない彼女に、僕はもう一度お礼を言った。

誰にも、僕の手を引く彼女にも聞かれないように、小さい声で、ありがとう、と言った。

「こら、ぼおーとしないの! 早く行くよ、理名!」

お礼を言ってる間ぐらい、そっとしておいてほしいものだが、仕方がない。

この子はこういう奴だ。

……最後に彼女と出会って別れた公園を一瞥する。

本当に、ありがとう。

もう二度と僕は、僕を助けてくれた彼女(僕)に会う事はないだろう。

なので、この言葉は何の意味も成さないのかもしれないが、それでもいい、僕は彼女のためだけに言うので、誰にも聞かれないように再度呟く。

「ありがとう、水島理名」

僕は僕の仮面を見る事は出来ない。

じゃないのだから。

了

